

多文化社会への支援に資する言語景観を活用した 初級日本語教育教材開発のための基礎的調査

磯野 英治

1. はじめに

街中にある看板やポスター、ラベルやステッカーなどの書き言葉がレアリアなどとして授業の一部に活用されることはこれまでもあったが、自然と目に入るこれらの身近な書き言葉を「言語景観」と定義、明記して「教育に生かすためのまとまった論考や教材の提供」を行ったものはない(磯野・西郡2017、磯野2020)。しかしながら、言語景観研究の広がりに伴って、言語景観が社会言語学や地域研究だけではなく、日本語教育・学習のための素材として有用であることが指摘されはじめ、授業実践についても論じられ始めている(磯野2011,2013,2015a,b,2019,2020、鎌田2014、ロング2014,2017,2019、磯野・西郡2017、西郡・磯野2014、西郡・黒田ら2016、李2019、甲賀2019)。

筆者は、街中で見かける身近な言語景観を素材として、日本語学習者が特徴的な日本語を通じて多様な社会的事象に気づき、かつ考察した結果に基づいて論理的に表現する力を獲得することを目的とした「言語景観を活用した日本語教育」を先駆的に提案し、研究を継続する中で、磯野・西郡(2019)、および磯野(2020)では、体系的な教材(ビデオ教材・教科書)とカリキュラムを公開した。これらは主に上級日本語教育や異文化コミュニケーション、社会言語学などの科目のために制作・出版したものである。

現在、日本では多言語・多文化社会が進み、外国人定住者の急増と日本語学習者の増加が著しい。これは、人材不足を補うために2019年6月に公布・施行された日本語教育推進法と特定技能に関わる外国人労働者の受け入れ拡大、2015年以降も毎年3万人のペースで増加し続けている外国人留学生(独立行政法人日本学生支援機構 2019)、海外の日本語教育機関数、教師数、学習者数の増加(国際交流基金 2018)、同じく増加する訪日外国人数(日本政府観光局 2019)といった政府の方針や社会的背景がある。誰にとっても身近な言語景観は、人々が日常生活の中で学ぶことのできる有用な教材であることは既述の通りだが、当該分野では、学習者のレベル別の議論や上述の社会的要請に関して、特に「外国人定住者の社会適応のための支援」の具体的な方略と教材等の提供ができていない現状があり、初級レベルに関しては喫緊の課題である。

そこで本研究テーマは、これまでの先行研究の知見を体系的に発展させる形で、外国人定住者の社会適応を中軸に据え、かつ世界中の日本語学習・教育者にも新たな機会を提供するための「言語景観を活用した多文化社会への支援に資する内容重視型初級日本語教育教材の開発」を枠組みとして掲げ、本研究ではその前段階として、試案しているビデオ教材の内容の一部と、新たに行った調査におけるデータ収集(基礎的調査)について報告する。

2. 先行研究

ここではまず、外国人のための言語景観をどのように考えるかに焦点をあてた研究を見ていく。まず、このようなアプローチから言語景観を検討している研究は「多言語サービス」、「やさしい日本語」、「外国人にはどう見えるか」といったテーマで行われている。「多言語サービス」では、庄司(2006)を中心に、以前から井上(2009)が外国人を対象とした民間表示の「アルファベットプラスタイプ(英語その他の外国語)」、バックハウス(2009)が東京都の公共表示の「4言語併記(いわゆる田中ほか(2012)にある標準タイプ)」を指摘し、関連する多言語化の動向が報告されてきた。また現在は、観光政策における言語サービスの重要性が提案されるなど(山川2020)、多くの研究がある。次に「やさしい日本語」は、阪神・淡路大震災における震災と外国人の言語問題を契機に用語の概念が形成された真田・佐藤・松田・ナカミズ・陳・ロング・姜・杉原(1996)を皮切りに、佐藤(1999,2000,2004)で災害時の情報提供、最近では子供やろう者、知的障害者を含む外国人との多文化共生を論じている庵・岩田・佐藤・柳田(2019)まで広がりを見せている。「外国人にはどう見えるか」という観点からは、街中にある公共表示について、言語景観データを使用して、外国人から見た場合の問題点と改善案を示している。これらは、それぞれ「外国人、多文化共生のためにいかに言語景観を改善していくか、街づくりに生かしていくか」について、非常に意義のある検討や考察、提案がなされている点で共通している。

これに対して、本研究の位置づけは改善案ではなく、既存の言語景観について、外国人、とりわけ定住する日本語能力の高くない人たちにとって生活する上で「分かりにくい点」、および「知っておくべき点」を体系的にまとめる点で、そのアプローチが異なる。街を見渡せば一目瞭然のように、多言語化の一方で街中には日本語の単独表記も多く、都市部から離れると公共表示でさえも日本語のみ、あるいは日本語と英語の二言語表記といった状況である。加えて、「多言語サービス」や「やさしい日本語」への変更、改善は意義があり、時代とともに変わっていくだろうが、日本全国、全てのニーズに迅速に応えるのには限界があり、時間と労力、費用がかかると考えられる。そして、その現状は、街中を歩けばすぐに分かることである。

本研究の新たな観点は、日本語教育学を専門とし、日々、日本語教育を担当し、地域の日本語教育に関わっている筆者から見て、あくまでも現存する言語景観の中で生活する初級レベルの外国人のために必要な点をまとめ、ビデオ教材として制作することを目的としていることである。

3. 既存の教材と本教材の関連

ビデオ教材の制作に先駆けて、これまでに公開している研究成果(制作物)と本教材との関連を以下に端的にまとめる(表1は磯野・西郡2019、表2は磯野2020)。

表1 ビデオ教材『言語景観で学ぶ日本語』の構成

| | | | | | |
|------------------|--------------------------|--------------|--------|---|---------------|
| 0.オープニング | 第1回 | 第2回 | 第3回 | 第4回 | 第5回 |
| 街中にある言語景観への気づき | 言語景観の概論(定義・対象・観点) | 公共表示と民間表示の違い | 音声と表記 | 使用文字の多様性とその効果 | 使用語彙の多様性とその効果 |
| 第6回 | 第7回 | 第8回 | 第9回 | 第10回 | 第11回 |
| ピクトグラム・記号 | 正用と誤用 | 適切性・自然さ | 役割・多様性 | 言語と経済 | 方言使用と都市・地方 |
| 第12回 | 第13回 | 第14回 | 第15回 | 16. エンディング | |
| 外国人集住地域と国際化・多民族化 | 電気・サブカルチャーなど特定分野における街の表記 | 社会的背景や使用意図 | 語用論的使用 | <ul style="list-style-type: none"> ・ビデオ教材で扱わなかった観点の紹介 ・2020年オリンピック・パラリンピック東京大会や2025年大阪・関西万国博覧会への言及と多言語社会、国際化の展望 | |

表2 教科書『言語景観から学ぶ日本語』の構成

| 書名 | 内容 |
|---------------------|---|
| 『言語景観から学ぶ日本語』、大修館書店 | 表1のビデオ教材を副教材として全ユニット(ビデオ教材の第1-15回と教科書のレッスン1-15)が連携。一言語としての「日本語」を段階的に、1科目、1コースとして学ぶことができる。各ユニットに「考え方」「実践篇(問題とヒント)」「応用篇」で構成。上級日本語教育や異文化コミュニケーション、社会言語学等の科目向け。 |

上記ビデオ教材、および教科書は日本語教育・学習向けとしては上級教材の位置づけである。しかしながら「初級レベルの外国人定住者の社会適応のための支援」を想定した場合、「第6回 ピクトグラム・記号」をはじめとして、「第3回 音声と表記」「第4回 使用文字の多様性とその効果」「第5回 使用語彙の多様性とその効果」などは、日本に住み、生活する中で外国人定住者が必要となるテーマである。つまりこ

れまでに公開してきた内容を改変することで、初級レベルのユニットが部分的に制作可能となることが分かる。



写真1 ピクトグラム



写真2 記号化された文字

例えば、ピクトグラムを例にとると、写真1は河童と市名が書かれているだけのものである¹。日本国内のピクトグラムには、このように文化的知識を必要とし、外国人には理解しにくいものがある。河童は幼児絵本や児童書でも物語が描かれており、日本人にとっては身近な存在、つまり日本文化である。そして、この河童を水辺に描くことによって「河童が住んでいるかもしれないこの池・川・湖・防火水槽などに近づく」と怖いぞ、いたずらされるかもしれないぞ、引きずり込まれるかもしれないぞ（→だから近づくな）」と、特に子供に伝えたいのであろう。当然、このピクトグラムそのものや、河童が水辺に描かれる理由は、背景が共有できないので外国人には分かりにくい例と言える。

このような国や地域に関する特有の事例は、記号（記号化された文字を含む）でも観察することができる。写真2は民宿の案内表示であるが「和」「洋」とのみ書かれている。ここから連想しなければならないことは、和室と洋室の区別だけではなく、「布団とベッド」「たたみとフローリング」「和食と洋食」など多岐に渡るが、街中にはこのような記号が溢れており、外国人定住者にとってその難易度に関わらず分かりにくいものも多い（磯野・ロング2012）。

以下では、既存の教材の枠組みで新たに収集したデータ、および初級レベルの外国人にとって「分かりにくい」、および「知っておくべき」新たな観点についてフィールドワークを行った基礎的調査の報告を行っていく。

¹ 写真1は船橋市という固有名詞に対して河童のイラストが添えられているだけであり、ビジュアル（言語としての役割、意味の抽象化、色彩など）の観点からも厳密には一般的なピクトグラムではなく、「文化固有ピクトグラム」と言えるようなものである。

4. 既存の教材と本教材の関連

ここでは、既存の教材の枠組みで新たに収集したデータとして、「ピクトグラム・記号」と「使用文字の多様性とその効果」について取り上げる。



写真3 温泉マーク



写真4 日本の動物①



写真5 日本の動物②

まず、世界で共通するピクトグラムは、空港をはじめとする外国人が利用する公共の場所（トイレや通路、食事をする場所など）をイメージすると分かりやすい。一方で、日本独自のピクトグラムを考えた場合、例えば温泉を示すピクトグラム（写真3）は、外国人が湯気を料理の湯気と考えてしまい、温かい料理を出すところなどと間違える例が従来から有名である（オリンピック・パラリンピック東京大会や大阪・関西万国博覧会など国際的なイベントを控える中で、経済産業省の産業技術環境局国際標準課が案内用図記号の JIS 改正の検討を開始している）。その他にも高速道路にある「イノシシ」「タヌキ」（写真4,5）など日本に多い動物のピクトグラムも、それを見た外国人の国にしなければ分かりにくいだろう。イノシシの場合は、写真4のように公園や歩道、大学のキャンパスなど、どこでも見かけるものであり、遭遇した場合に「襲ってくる危険性」もあることから掲示されている言語景観である。その意味では、「飛び出してくる可能性」から、主に車道の公共表示として見られる言語景観である「タヌキ」、「キツネ」「トリ」「サル」などとは、意味合いが異なる。



写真6 時間を表す記号②



写真7 時間を表す記号②

写真6,7も既存のビデオ教材の内容である「ピクトグラム・記号」に関するもので、時間貸し駐車場の看板であるが、それぞれ「24H」と「24h」が問題になる例である。

例えば「1時間」「3時間」は、それぞれ「1hr.」「3hrs.」のように表記するのが自然であり、特に英語圏の外国人には見慣れている(一般に通用している)記号とはちょっとした違いがあるだけでそれと認識できなくなったり、別のものに思われたりすると指摘がある(ロング2014)。またこれらのように「24H」「24h」など大文字、小文字など表記のバラつきも分かりにくい一因になるだろう。



写真8 ひらがな

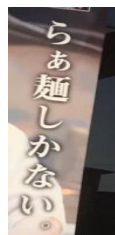


写真9 ひらがな+漢字



写真10 カタカナ

次に、「使用文字の多様性とその効果」について、写真8,9はラーメン店の言語景観であるが「らあめん」(写真8)、「らあ麺」(写真9)とある。ラーメン店の言語景観にはバリエーションがあり、一般的な表記である「ラーメン」のほか、「ラ～めん」「らーめん」「ら～めん」「らあめん」「らー麺」「らあ麺」「拉麺」など様々である。このような飲食店に関する同じものを指す言語景観のバリエーションは「焼き鳥」「焼とり」「やき鳥」「やきとり」、「レストラン」「れすとらん」など数多くある。また、飲食店に限らず、写真10のように「車・くるま」ではなく、「クルマ」とあえてカナカナ表記するような事例は、例えば「眼鏡」「めがね」「メガネ」など、やはり多い。このように通常漢字で表現する言葉をひらがなやカタカナに、あるいはカタカナで表現する言葉をひらがなや漢字で表記し、一般的な書き方をあえてしないことによって、近づきやすさや雰囲気作り、目につきやすさを狙う事例は名詞(例えばブラシ・ぶらし・刷子、固有名詞を含む)を中心に、イ形容詞(熱い・あつい・アツい)、ナ形容詞(綺麗・きれい・キレイ)、動詞(ずれる・ズれる)、副詞(すっきり・スッキリ)などがあるが、学んだ通常表記とは異なるため、外国人にとっては一見して分かりにくい表記になると言える。

5. 新たな観点と事例

これまでに既存の教材の枠組みから、外国人にとって分かりにくい事例を検討してきたが、ここでは初級レベルの外国人のための「分かりにくい点」、および「知っておくべき点」について、基礎的調査を行った新たな観点を報告していく。



写真11 語彙のバリエーション①

写真12 同②

写真13 同③

写真11は、ATMの利用案内であるが、それぞれ「銀行」「信用金庫」「ろうきん」「バンク」のように語彙のバリエーションがあり、その全てを「現金の入出金などの手続きができるもの」と捉える必要がある。ATMは日常生活で外国人にとっても必須であり、語彙としても「銀行」は初級の初期で出てくる²。口座を作る際も一概に「銀行」だけではないことも知っておく必要があるだろう。写真12,13は、病気になった際の情報としての言語景観である。写真12には、それぞれ「うかい医院」「日進おりど病院」、写真13には「いこま内科クリニック」とあり、病気になった際に行くことになる表現にバリエーションがある。大阪府医師会(2006)によれば、これらは入院ベッド20床以上が「病院」であり、そのほか、診療所に分類される医療機関は「～クリニック」や「～医院」、「～診療所」、「～科」と自由に表記を選べるようである。しかしながら、これらの表現を併せて一般名詞としての「病院」であり、「銀行」と同様に初級の初期で出てくることから、外国人はこのバリエーションをおさえておく必要があるだろう³。また、このような表現は、日常生活に必要な手続きや機関に限ったことではなく、写真14のように、日々生活する上で必要な飲食にも関わってくる(写真14)。日本人に身近な食べ物である「おにぎり」は、同様に日本語の授業でも初級の段階から扱われことの多い単語であるが、この全国チェーンのコンビニエンスストアののぼりには「おむすび」⁴とある。仮にピクトグラムがなければ「おむすび」が何なのか分からないという意味では、外国人にとって分かりにくい語彙のバリエーションと言えるだろう。写真11-14は主に、日本に住む外国人にとって身近であり、かつ初級レベルの内容であるのにも関わらず、様々なバリエーション、言い換えが存在し、分かりにくい事例であると指摘することができる。

² 『みんなの日本語 初級I本冊』Unit1、『NEJ VOL.1』Unit2など。

³ 『みんなの日本語 初級I本冊』Unit1、『新日本語の基礎 I 本冊』Unit5など。

⁴ 「おにぎり」「おむすび」「にぎりめし」は、『常陸国風土記』などに記述があり、柳田(1977)や小野(2005)の指摘もあるなど語源、形、方言からその違いの考察が可能であるが、これらは同じものを指し、単に呼び方が違うだけ、というのが現在の多くの辞書(例えば広辞苑)の見解である。このため、諸説については本論から外れるため、言及しない。



写真14 同④



写真15 読み順①



写真16 読み順②

次に、日本語のレベルとは関係なく、日本で生活する上で知っておくべき言語景観の諸特徴について見ていく⁵。写真15は、どこにでもあるコインパーキングの言語景観で、注目すべき点は四角く囲われたボックスの4文字である。通常、このような文字列を学習することはないため、語彙の難易度はさておき、「最大料金」「基本料金」「入庫方法」に関して、それぞれボックスで囲まれた日本語を「上から、左から右に読む」という読み順のルールを理解する必要がある。写真16は、昔の日本を想起させることを狙って、あえて右から読むように横書きし、ノスタルジックな雰囲気を演出している定食屋である。上段には「堂食ンダモ」、下段には「房厨京東」とあり、さらに縦書きを模して四角く囲われたボックスの4文字(東京厨房)も「右から、上から下に読む」という仕様になっている。写真15,16のような表記は、日本語非母語話者が普段から見慣れている「横書きで左から右」という日本語の書き方とは異なり⁶、文字が読めても一見して文の理解にはすぐに届かないだろう。



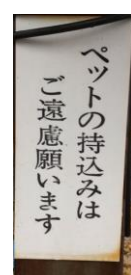
写真17 禁止



写真18 注意



写真19 キケン(危険) 写真20 遠慮



⁵ JLPTスケールで「最大」「入庫」「東京」「厨房」は級外、「モダン」はN2、「基本」「料金」「方法」はN3、「食堂」はN5である。

⁶ 日本語教材は横書きがほとんどであり、日本語非母語話者がタイピングするパソコンのテキストも同様である。

加えて、日本語のレベルとは関係なく、日本で生活する上で知っておくべき言語景観として、写真17から20のような禁止や注意喚起に関する言語景観が挙げられる⁷。街を歩けば分かるように、私たちの身の回りにはこのような表現が溢れており、目にしない日はない。ロング(2014)では、禁止・注意(類)の言語景観を働きかけ機能の観点からその表現形式を「直接的働きかけ」と「間接的働きかけ」に分類し、14の事例を示した上で、言語景観の意図(内容)が非母語話者にとって、いかに分かりにくいかを論じている。しかしながら、内容はさておき、まず当該言語景観が「禁止」や「注意」を指示していること(何かをやってはいけないこと)自体が、初級レベルの外国人定住者にとっても理解できなければならない。このような観点から、フィールドワークを行い、データの分類を試みると、その上位分類として写真17「禁止」、写真18「注意」、写真19「キケン(危険)」、写真20「遠慮」というキーワードが抽出された。これら4つのキーワードは、いずれも単独表記や文頭に単独、あるいは文中に書かれており、初級レベルの非母語話者にとっても生活の中でまず「やってはいけないこと」や「注意すること」が書かれていると気づかなければならない第一歩である。仮にその内容が完全に理解できなくとも、まずそのことに気づけば、その場で注意を払ったり、生活の中での意識向上につながり、内容をその場で誰かに聞いたり、改めて自身で確認するための契機ともなろう。特に上記のキーワードを覚えておくメリットは、ピクトグラムが併記されていない写真17,19,20のような場面で発揮される。

6. おわりに

本稿では、「言語景観を活用した多文化社会への支援に資する内容重視型初級日本語教育教材の開発」の前段階として、試案しているビデオ教材の内容の一部と、新たに行った基礎的調査について報告した。本研究のアプローチは、「緊急時の情報のための手段」や「既存の言語景観の改善案」ではなく、現存する言語景観の中で生活する初級レベルの外国人のために「分かりにくい点」、および「知っておくべき点」をまとめ、その情報を提供することによって、日本語教育学の観点から貢献していくことである。

日本語学校を含む留学生の増加、日本語教育推進法と特定技能に関わる外国人労働者の受け入れ拡大、さらには中部地方を中心とする定住日系人の日常など、日本語レベルの決して高くない定住外国人が生活する上で、社会適応のための支援はますます求められていけよう。今後は、上記の観点から引き続き、データの収集と分類を行うとともに、教材の制作に向けた具体的なシナリオの構造を検討することを課題とする。

参考文献

秋本吉徳(2001)『常陸国風土記 全訳注』、講談社学術文庫、pp.1-208.

⁷ JLPT スケールで「禁止」はN3、「注意」「危険」「遠慮」はN4である。

- 庵功雄・岩田一成・佐藤琢三・柳田直美(2019)『〈やさしい日本語〉と多文化共生』、ココ出版、pp.1-400.
- 李舜炯(2019)「韓国大邱広域市の日本語の言語景観にみられる言語接触」『都市空間を編む言語景観』、李舜炯 編、中文出版(韓国)、pp.231-256.
- 磯野英治(2011)「韓国における日本語の言語景観—各都市の現状分析と日本語教育への応用可能性について—」『世界の言語景観 日本の言語景観—景色のなかのこトばー』、内山純蔵 監修・中井精一・ダニエル ロング 編、桂書房、pp.74-95.
- (2013a)「言語景観に注目した社会的背景・地域性の分析と日本語教育への応用」『2013年度韓国日語日文学会春季学術発表大会予稿集』、韓国日語日文学会、pp.157-161.
- (2013b)「言語景観を日本語教育に応用する視点」『日語日文学研究』第86集、韓国日語日文学会、pp.289-302.
- (2015a)「日本語教育に活用可能な言語景観の分類に関する考察」『大阪大学国際教育交流センター論集 多文化社会と留学生交流』第19号、pp.35-41.
- (2015b)「身近にある言語景観を素材とした多文化クラスにおける教育実践」『日本語研究』第35号、首都大学東京・東京都立大学 日本語・日本語教育研究会、pp.193-200.
- (2019)「日本語教育に活用可能な言語景観と教育実践—理論と方法—」、中井精一 ダニエル・ロング 監修、李舜炯 編『都市空間を編む言語景観』、中文出版社(韓国大邱)、pp.183-206.
- (2020)『言語景観から学ぶ日本語』、大修館書店、pp.1-160.
- 磯野英治・西郡仁朗(2017)「ビデオ教材『東京の言語景観—現在・未来—』の公開と教育実践」『日本語教育』166号、日本語教育学会、pp.108-114.
- 磯野英治・西郡仁朗 監修(2019)ビデオ教材『言語景観で学ぶ日本語』、2017年度～2019年度科学研究費若手研究(B)研究課題番号17K13490「言語景観を教材とした社会文化的理解を目指す内容重視型日本語教育の研究」(研究代表者:磯野英治)(https://youtu.be/qB0-eSC_yUQ)
- 磯野英治・ロング,ダニエル(2012)「言語景観の語用論的分析—非母語話者の視点を取り入れた試験的研究—」『日本語学会2012年度春季大会予稿集』、日本語学会、pp.241-246.
- 井上史雄(2009)「経済言語学からみた言語景観—過去と現在—」『日本の言語景観』、庄司博史・ペート バックハウス・フロリアン クルマス 編、三元社、pp.53-78.
- 大阪府医師会(2006)『診療所と病院』(2121年1月30日閲覧、<http://www.jotoishikai.or.jp/kyouiku/kenkou/02/index.html>)

- 小田きく子 (2005) 『近代文化研究叢書 3 おにぎりに関する研究 第 1 報』、昭和女子大学近代文化研究所。
- 海外技術者研修協会 編 (2001) 『新日本語の基礎Ⅰ 漢字かなまじり版』、海外技術者研修協会、pp.1-240.
- 鎌田美千子 (2014) 「言語景観に着目した漢字テキスト作成の実践と課題—PBL の手法に基づいて—」『日本語教育方法研究会誌』Vol.21.No2、日本語教育方法研究会、pp.50-51.
- 甲賀真広 (2019) 「短期日本語研修における自発的学習を促す言語景観調査」『都市空間を編む言語景観』、ダニエル ロング・中井精一 監修、李舜炯 編、中文出版 (韓国)、pp.207-229.
- 国際交流基金 (2018) 『海外の日本語教育の現状—2018 年度 日本語教育機関調査より—』、国際交流基金、pp.1-93.
- 佐藤和之 (1996) 「外国人のための災害時のことば—Easy Japanese の提唱とラジオの効用—」『月刊言語』 25-02、大修館書店、pp.94-101.
- (1999) 「震災時に外国人にも伝えるべき情報—情報被災者を一人でも少なくするための言語学的課題」『月刊言語』 28-08、大修館書店、pp.32-41.
- (2000) 『「災害時の外国人用日本語」マニュアルを考える—災害時情報と外国人居住者—』『日本語学』 19-02、明治書院、pp.36-51.
- (2004) 「災害時の言語表現を考える—やさしい日本語・言語研究者たちの災害研究—」『日本語学』 23-10、明治書院、pp.34-45.
- 真田信治 (1996) 『「緊急時言語対策」の研究について』『月刊言語』 25-01、大修館書店、pp.94-99.
- 庄司博史 編 (2006) 『まちかど多言語表示調査報告書』、多言語化現象研究会。
- 杉原達 (1996) 「阪神大震災と多言語放送—ミニ FM 局の意義—」『月刊言語』 25-08、大修館書店、pp.88-93.
- スリーエーネットワーク 編 (2009) 『みんなの日本語 初級Ⅰ第 2 版 本冊』、スリーエーネットワーク、pp.1-249.
- 田中ゆかり・早川洋平・富田悠・林直樹 (2012) 「街のなりたちと言語景観—東京・秋葉原を事例として—」『言語研究』 142 号、日本言語学会、pp.155-169.
- ナカミズ, エレン・陳於華 (1996) 「緊急時における外国人の言語問題とその対策—面接調査からの一考察—」『月刊言語』 25-04、大修館書店、pp.94-101.
- 西口光一 (2012) 『A New Approach to Elementary Japanese vol.1—テーマで学ぶ基礎日本語—』、くろしお出版、pp.1-224.
- 西郡仁朗・磯野英治 監修 (2014) ビデオ教材『東京の言語景観—現在・未来—』、東京都アジア人材育成基金 (https://www.youtube.com/watch?v=NHV338g_NB0).

- 西郡仁朗・黒田史彦・福田寺紫陽・市川紘子(2016)「東京の言語景観と留学生から見た多言語対応状況—2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて—」『人文学報』第512-7号、首都大学東京、pp.95-111.
- バックハウス、ペート(2009)「日本の言語景観の行政的背景—東京を事例として—」『日本の言語景観』、庄司博史・ペート バックハウス・フロリアン クルマス 編、三元社、pp.145-170.
- 日本学生支援機構(2019)『2019(令和元)年度外国人留学生在籍状況調査結果』、日本学生支援機構、pp.1-20.
- 日本政府観光局(2019)『2019年 国籍別 / 目的別 訪日外客数 (確定値)』、日本政府観光局、pp.1-16.
- 松田陽子(1996)「多様な外国人に対する情報提供を考える」『月刊言語』25-03、大修館書店、pp.95-100.
- 山川和彦 編(2020)『観光言語を考える』、くろしお出版、pp.1-225.
- 柳田國男(1977)『食物と心臓』、講談社学術文庫、pp.1-247.
- ロング、ダニエル(2014)「非母語話者からみた日本語の看板の語用論的問題—日本語教育における『言語景観』の応用—」『人文学報』第488号、首都大学東京人文科学研究科、pp.1-22.
- (2017)「語学授業に興味を持ってもらう —ツールとしての言語景観—」『首都大学東京教職課程紀要』1、pp.79-89.
- (2019)「日本語学習者を悩ませる言語景観」『都市空間を編む言語景観』、李舜炯 編、中文出版社、pp.257-271.
- ロング、ダニエル・姜錫祐(1996)「外国人における緊急時報道の理解について」『月刊言語』25-05、大修館書店、pp.98-104.

付記

本稿は2020年12月に行われた韓国日語教育学会2020年度第37・38回国際学術大会で発表した「言語景観を活用した初級日本語教育教材開発のためのアプローチと基礎的調査」を加筆・修正したものである。貴重な意見やアドバイスをくださった方々に感謝申し上げます。

なお本研究は、2020年度～2023年度科学研究費(若手研究)研究課題番号20K13093「言語景観を活用した多文化社会への支援に資する内容重視型初級日本語教育教材の開発」(研究代表者:磯野英治)の成果の一部である。

(いその ひではる・名古屋商科大学 国際学部)